

論語 解釈の流れ

古注 ↑ ————— ↓ 新注

南宋(1127~1279)以前

朱熹(朱子)(1130~1200) 『論語集注』

魏(220~265)

しっかい
『論語集解』

かあん

何晏(190~249) 他4名

現存するまとまったもの。「古注」という。

晋(265~420)

『集注』

こうき

江熙

『集解論語』ともいう。この本には、晋代の十三(書家)の注釈が集成されていた。『論語集注(朱熹)』とはちがう。

南朝 梁(502~557)

『論語義疏』

おうがん

皇侃(488~545)

江熙の本を利用しながら、新たな『論語』の注釈書として『論語義疏』を編纂した。経書(経典)に対する義疏は、南北朝時代に数多く作られたが、完本として現存するのは唯一『論語義疏』だけである。

(註1) [内容は『論語集解』に忠実に従った解釈と、『論語集解』の解釈には関わらない説(または『論語集解』に批判的な説)の二種類があり、必ずしも『論語集解』の説を忠実になぞるわけではない。]

(註2) [義疏(ぎそ)は、伝統中国において、経典の本文(また注文を含む)の内容を詳細に解説した書物のこと。「義」は意義、「疏」は疏通の意で、合わせて経義を疏通することを示す。]

北宋真宗(997~1022)

『論語正義』

けいへい

邢昺(932~1010)

『論語義疏』を下敷きにしながら、『五経正義』を切り貼りしながら作られたものであるが、この成立によって『論語義疏』は顧みられなくなり、印刷される機会を得ることがなかった。

『論語注疏』

『論語集解』・『論語義疏』をもとにして、^{けいへい} 邢昺が詳細な注を加えたもの。

十三經注疏の一つ。二〇卷。もと一〇卷。魏の何晏注、宋の邢昺けいへい疏。
「論語」についての漢魏の諸説を集成した何晏注に、邢昺けいへいが梁の皇侃おうがんの義疏に改定を施した疏を加えたもので、朱熹の新注である「論語集注」に対して、古注の典型とされる。

南宋 朱熹(朱子) (1130~1200)

『論語集注』 しゅうちゆう

何晏等による『論語集解』の「古注」に対して「新注」と称される。

『論語集注』では、『論語』に即して朱熹自らの思想が語られる。

朱子が同じく自著の『孟子集注』と併せて「一字も添えれず、一字も減らせられぬ」と自負した書であり、道学や周辺の儒学者の論語解釈を集め、精髓をここにまとめている。

日本

京都 伊藤仁斎 (1627~1705)

『論語古義』
こぎ

江戸 荻生徂徠おぎゅうそらい (1666~1728)

『論語徴』
ちよう